

「底が突き抜けた」時代の歩き方 343

結局のところ北朝鮮は何のために日本人を拉致したのか？

10・15付産経新聞の夕刊十五（社会）面には、北朝鮮から一時帰国する5人の拉致被害者を出迎える家族らの期待と不安に揺れ、緊張で高まっている記事が写真と共に大きく掲載されている、その横に、`「北」工作関与を断定、の中見出し、`よど号犯妻に有罪判決、の小見出しの記事が掲載されている。その記事にはこう記されている。

《よど号ハイジャック事件のメンバー、赤木志郎容疑者（54）の妻で、旅券法違反（返納命令拒否）などの罪に問われた赤木恵美子被告（47）の判決公判が15日、東京地裁で開かれ、山室恵裁判長は懲役2年、執行猶予4年（求刑懲役2年）の判決を言い渡した。

判決理由で、山室裁判長は「外務当局は、被告を含む日本人女性6人が北朝鮮の工作員のキム・ユーチョルと接触しており、テロに向けた支援活動を封じるために旅券返納を命令した」と指摘し、「北朝鮮の工作員の指導の下で工作活動に関与し、本件各犯行を敢行したことは間違いない」と断定した。しかし、「立証はされておらず、この点を量刑に重視することはできない」と述べ、執行猶予付きとした。これまでの公判で、よど号犯の元妻、八尾恵元店主（46）が出廷し、「有本恵子さん＝当時（23）＝を北朝鮮へ連れ出した」と証言。赤木被告は被告人質問でこの証言を否定していた。

一方、判決公判では、八尾元店主が、北朝鮮の工作員から日本国内で自衛隊員らの調査などを依頼され、現金6百万円を受け取っていたことが明らかになった。》

拉致被害者を出迎える家族の記事と、「北」工作関与を断定されたよど号犯妻に対する有罪判決の記事が、同一紙面に隣り合わせになって掲載されているのに目を止めたのは、有本恵子さんらを北朝鮮へ拉致したにちがいない「よど号」グループやその妻、家族たちもまた、結局のところ北朝鮮に拉致された者たちではなかったかという思いを禁じえなかったからである。もちろん、彼らは蓮池さんたちのように無法に連行された拉致被害者と異なって、北朝鮮への入国には彼ら自身の意思が積極的に関与していた。ちょうど59年末から始まった「帰国事業」に従って「地上の楽園」に憧れ、帰国した10万人近い在日朝鮮人たちと彼らはどこか似ていた。この在日朝鮮人たちも自由意思で帰国したのであり、強制ではなかったけれども、一度北朝鮮の地に足を踏み入れるや、たちまち拉致状態に置かれてしまった。北朝鮮生まれの国民も自由意思を発揮できない

拉致状態にあるのと同じ意味で、帰国在日朝鮮人も「よど号」グループも今回の拉致被害者たちと同様、拉致状態にあったといえるかもしれない。

無法に連行されてか、あるいは自由意思をもってか、いずれであれ、北朝鮮に引き寄せられて留め置かれた者たちは誰一人として、金日成―金正日の独裁体制の掌中から逃れることはできない点で、拉致状態に置かれていたことは間違いない。もちろん、その拉致状態は「帰国事業」で北朝鮮に渡った在日帰国者と「よど号」グループ、拉致被害者たちとはそれぞれ態様が異なる。たとえば、在日帰国者は「よど号」グループや拉致被害者たちと異なって日本人ではないし、生まれながらの拉致状態にあると考えられる北朝鮮国民とも異なる。在日帰国者は家族や親族が日本に居住している者が多く、北朝鮮で窮乏化すれば送金を依頼するという外とのパイプが見出せるからだ。そして当然ながら、同じ日本人であっても、「よど号」グループと拉致被害者たちとはさまざまな面で異なる。だがどのように区別されようとも、在日帰国者も「よど号」グループも拉致被害者たちもすべて、北朝鮮にとっては利用される対象であることには変わりはない。

在日帰国者たちはどのように北朝鮮に利用されたのか。『文藝春秋』（02・11）でジャーナリストの石丸次郎は、北朝鮮から亡命してきた50代後半の四国生まれの元在日朝鮮人の男性（仮にBさん）に、8月初旬ソウルでインタビューを行ったことを記している。Bさんは40年前の1960年代初頭に両親と共に北朝鮮に渡り、『帰国からしばらくは、日本にいる親戚から送金を受け、北朝鮮の中では裕福な暮らし』ができ、『70年代に結婚、二人の子供をもうける。帰国者としては珍しく労働党員になれた』が、職業は明かせないという。『90年代後半、北朝鮮の食糧事情が深刻化するのと同じくして日本の親戚からの仕送りが途絶えた。Bさん一家は途端に飢餓に直面するようになり、念入りに計画を立てて三年がかりで中国に脱出。更に韓国入りを果たしたBさんは家族を中国から脱出させることに取り組んでいる。』

『ほぼ9年間にわたって北朝鮮―中国国境に通』い、およそ400人に上る脱北者たちと接触した石丸次郎は、Bさんのような在日帰国者について次のように記述、報告する。『この北朝鮮難民・越境者の中に、日本生まれの「在日帰国者」が混じりだしたのは98年頃からだ。』

北朝鮮に渡った在日朝鮮人は、59年からの25年間に9万3千人あまりに上る。当時の在日朝鮮人人口の6分の1近い人が社会主義の北朝鮮に帰国する道を選択したのは、日本社会の差別・制約に加えて、在日本朝鮮人総連合会（総連）の「北は地上の楽園」という宣伝があったからだ。

深刻な南北対立の下で体制間競争をやっていた当時、資本主義国日本に住む在日朝鮮人が韓国ではなく、北朝鮮に大量帰国することの政治的宣伝効果は絶大なものがあった

ことだろう。集団帰国を運動として大展開するために、総連は組織を上げて「地上の楽園」キャンペーンを行った。

98年に北朝鮮を脱出した李昌成さんは、62年に岡山から単身渡航帰国した帰国者である。李さんは帰国当時のことを次のように言った

「総連は北朝鮮に行けば、衣食住は完璧に保証され、勉学をしたいものは大学に行けるし、希望する職に就ける。発展する社会主義の祖国に帰ろう言うて宣伝したわけですよ。ところが、帰国してみたら食べ物も粗末なものしか与えられない。希望する進路に行けた人はほんの一握り。発言で失敗して収容所に引っ張られる。出世はできない。大勢の帰国者が恨みを持って死んでいきましたよ。帰国者は皆総連にだまされたと思っています」

朝鮮人として誇りを持って暮らしていくために帰った北朝鮮で、帰国者たちは予期せぬ貧困と、異端分子として新たな差別と監視に晒されることになったのだ。いまだ安否確認もできないケースも非常に多い。

そして、10万人近い人が帰国船に乗る背中を押したのが、メディアだった。当時の日本メディアの訪朝記を読むと、だいたいお決まりなのが、

「活気に溢れ発展目覚しい平壤」

「帰国者たちは皆元気に活躍」

という内容だ。当時もやはり案内員という名の監視がつき、お膳立てされた取材コースを回るのが常だったという。現在の平壤取材と変わらぬ制約や演出が40年前から存在したのである。

北朝鮮がどのような状況なのかろくに取材も検証もせずに、「発展する北、混乱する南」という時代のムードで報じ、帰国運動を礼賛した責任はいかにも重い。》

在日朝鮮人の「帰国事業」が、『発展する北、混乱する南』という時代のムード」を醸成する上での絶大な政治的宣伝効果を期待するものであったことはわかる。しかし、北朝鮮が「地上の楽園」ならぬ食糧危機や貧困の現実だったとすれば、大量の在日帰国者を受け入れるだけでも大変な重荷であっただろうのに、政治的宣伝効果以外の物質的効果を支配者が計算しなかったなどとはとても考えられない。家族ぐるみの在日帰国者であれば、当然永住するつもりで日本で蓄えた全財産を携えて帰国したにちがいないし、単身の帰国者であってもそれなりの金品を携行していったことが考えられる。大量の集団帰国であれば、それらの金品も莫大であつたにちがいない。もちろん、それらの金品は頹廢した悪の資本主義経済で不当に蓄積されたものであったから、北朝鮮に到着するやいなや、各個人の手から没収された。

北朝鮮の「帰国事業」は帰国者本人たちの労働力だけでなく、彼らが携えてくる財産が狙いだったと考えられる。更に日本にいる親戚から送金を受けていた先のBさんの例

にみられるように、北朝鮮からすれば在日帰国者は日本の親族から金を引き出す人質でもあった。送金してほしいといわれた日本の家族や親戚からすれば、北朝鮮に渡った家族がひもじい思いをしないようにと、祈るように送金しつづけるのは当然であった。これらのお金も相当な額であったにちがいない。人質は労働力と金づるとしてだけではなく、北朝鮮の工作員が日本人を拉致するときに手引きさせたり、工作活動をする際に手伝えたりする効果も発揮したことが報じられている。

大量の在日帰国者たちが政治的宣伝効果や貴重な金づるとして北朝鮮に利用されつづけていることは明白であるとして、では散歩中の海岸で無理矢理拉致された日本人たちは、どのような意図をもって北朝鮮に利用されようとしているのだろうか。政治的宣伝効果はもちろんのこと、金づるのような物質的効果も期待できないとなれば、北朝鮮は一体拉致日本人たちに何を期待していたのか。日朝の首脳会談で拉致事件についての金正日の言葉は次のようなものであった。

「70年代、80年代初めまで特殊機関の一部に妄動主義者がいて、英雄主義に走ってこういうことを行ってきたと考える。二つの理由があると思う。一つは特殊機関で日本語の学習ができるようにするため、一つは日本人の身分を利用して南（韓国）に入るためだ。私がこういうことを承知するに至り、責任ある人々は処罰された。これからは絶対ない。この場で遺憾であったことを率直におわびしたい。二度と許すことはない。」

この金正日の言葉を額面通りに受け取ることとはできないとしても、対南工作以外のもう一つの「特殊機関で日本語の学習ができるようにするため」という理由には、誰もが首を捻らないわけにはいかなかった。たとえば、詩人の金時鐘は10・3付産経新聞で、『日本語の学習や、日本人の生活慣習を習わせる必要があったとするなら、「地上の楽園」に憧れて帰国した10万人近い在日同胞たちがおり、中には大学出や学位取得者も少なくなく、夫に従って海を渡った1800人からの日本の婦人たちもいる。「教育係」に事欠く国ではさらさらなかったはずだ。』と疑問を呈し、横田めぐみさんについても、『いかに無法な国とはいえ、13歳そこらの隣国の少女までさらっていった、一体、どれほどの利益が北共和国にもたらされるというのだろうか。ましてや、国家機密に属する情報活動のスパイ養成に、無理やり連れていった女性、平壤会談で明かされた田口八重子さんに該当するようだが、その彼女に「大韓航空機爆破」という、空恐ろしい事件の犯人の教育係を仰せ付けるであろうか。』と憤る。

作家の西木正明もまた、10・26付産経新聞でいう。

《これは実に奇妙な話だ。日本人になりすまして対南工作を行うためとするのはおそらくその通りだろうが、もうひとつの、日本語教師を調達するためという説明はいただけない。拉致が頻発したのは1970年代後半であるが、その頃朝鮮半島にはまだ、流^{りゅう}暢^{ちやう}な日本語を話す人がたくさんいた。1910年から45年までの日韓併合時代、日本語

をきっちりと習得した世代が北朝鮮社会の中核を占めていたはずだからだ。日本語教習目的で、危険を冒して日本人を拉致する必要などなかったのである。

この時期北朝鮮が拉致したのは日本人だけではない。彼らにとって同胞である韓国人も多数拉致している。韓国・朝鮮語の教習のために韓国人を拉致したなどという説明はなりたないから、目的は別なところにあると考えるべきだろう。》

作家の島田雅彦も『週刊毎日』（02・11・10）の連載の中で、しきりに首を捻っている。《結局のところ北朝鮮は何のために日本人を拉致したのか？ この国家犯罪の動機は理解に苦しむ。通説では日本や韓国で破壊活動を行うスパイの養成のためということになっている。そうしたスパイ要員が日本人になりすますために、日本語教育を施す必要があり、その教育係となる日本人を拉致した。しかし、日本語を教えるだけなら、わざわざ手間とコストのかかる拉致などしなくても、学术交流の名目か何かで教師を呼び寄せればよかっただろうに。日本人に洗脳を施し、金正日独裁国家に奉仕させること自体が目的だったのだろうか？ 金賢姫に日本語を教えたのが、朝鮮名を李恩恵という日本人の拉致被害者だった。その金賢姫が実行した航空機爆破テロ……これも何のために行われたのか、わからない。破壊活動の何が北朝鮮の国益になっていたのか、さっぱりわからない。たぶん、金正日の妄執に過ぎないだろう。だが、政治的妄執という点では、ブッシュも日本のタカ派も変わらない。》

日本人拉致の疑問への切り込みは、北朝鮮を遙かな祖国と仰ぎ見る情に曇らされているために在日一世の金時鐘が一番鈍い。北朝鮮をそれ自体としての対象としないのだ。彼に較べると、作家の西木正明や島田雅彦のほうがわからないといいながらも、拉致目的の不明さそのものをくっきりと浮かび上がらせている。「金正日の妄執」を指摘する島田雅彦は韓国映画『シュリ』に触れて、こういう。

《北朝鮮の女スパイが日本で整形手術を受け、韓国女性に戸籍に収まり、韓国警官の許嫁になりすまし、韓国内で破壊活動を行う設定になっていた。恋人が北朝鮮のスパイであることを警官が察するシーンは切なく、テロリストのリーダーと韓国の警官がサッカースタジアムで対決するシーンはハードボイルドに翻案された南北対立という感じだった。敵役の北朝鮮のテロリストは高邁なる主体思想と共産革命の悲願を語り、墮落した資本制経済に毒された韓国を唾棄すべきものと決めつけており、おそろべきアナクロニズムと聞こえたが、そのアナクロニズムこそが北朝鮮なのだ。》

そして、《「シュリ」はよくできたエンターテインメントだが、そこには南北統一の祈念も込められていたはずである。》と付け加える。映画『シュリ』についての見解は、私は彼と異なる。この映画が男女の恋愛映画を越えて、はるかに切なく訴えてくる力を持っているのは、北朝鮮のテロリストが「墮落した資本制経済に毒された韓国」内で破壊活動を行う立場を一見取りながら、南の民衆が飽食を貪っている一方で、北では民衆

が飢え、子供たちが次々と倒れ、娘が売られていく惨状を生みだしているのは誰か、それは見せかけの統一ばかりを話し合っているぬくぬくと肥えふとった豚ども、南北の指導者どもが負うべき責任ではないのか、という彼らの悲痛な心情がこちらに伝わってくるからである。北のテロリストは「南北統一の祈念」の陰で最大の犠牲を被っている北の民衆の立場に立つことによって、北と南の双方の支配者に刃向かう反乱軍として登場せざるをえなくなっていたのだ。

『シュリ』は韓国映画でありながら、北の民衆が直面している惨憺たる現実を見据えるなら、北も南もそれぞれの枠組みを越えていかねばならないというメッセージを凛々と響かせていたのである。したがって、双方の立っている現実が重なり合わない恋愛（統一）は成就しないことをくっきりと浮き彫りにすることによって、南の主人公の警官と北の女スパイとの恋愛が国境に遮られていく悲恋のパターンをも抜け出していた。産経新聞ソウル支局長の黒田勝弘が、平壤での南北首脳会談の際に韓国側主催の晩餐会の席で、金正日総書記が韓国側の朴在圭統一相に映画『シュリ』について、「自分も見たがあんなありもしないような映画は作らないほうがいい」と不満を吐露したということ、『諸君！』（00・9）に記し、その不満の理由を次のように探っている。

《メロドラマ仕立てではあっても、北朝鮮の南侵テロ部隊により最後は南北の首脳が爆殺されかかるという、まるで「テロ国家・北朝鮮」そのものを描いたような激しい映画だから、金正日氏としても一言苦情をいいたかったのかもしれない。

しかし金正日総書記の映画「シュリ」に対する不満あるいは不快の核心をばくなりに推測すれば、映画で主人公になっている北朝鮮のテロ部隊が実は「反乱部隊」として設定されているという点にあったのではないか。

今少し映画のストーリーを紹介すれば、問題のテロ部隊は飢餓に象徴されるような北朝鮮の現状を打開するためには南北統一しかないと決意する。話し合いや会談などで現状維持しか考えてこなかった政治家たちにはもはや期待できないとし、武力による南北統一革命を狙い、その起爆剤として「特殊8軍団」から離脱し南北首脳の同時爆殺を計画するという設定になっている。（中略）

つまり話は北朝鮮の軍内部における純粋分子による反乱であり、一種のクーデター計画なのだ。「民の疲弊」に思い余った純粋派将兵による決起という話だから、いわば北朝鮮版の「二・二六事件」である。

しかし二・二六事件より極端なのは、映画では南北両方の首脳爆殺計画まで想定している。これでは「皇軍」——つまり金正日氏の親衛隊としての存在さえ否定していることになる。朝鮮人民軍最高司令官、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長、元帥、である朝鮮労働党総書記、金正日将軍にとっては、自ら爆殺されるような映画は絶対に認められない。》

《映画「シュリ」については昨年、韓国で大ヒットしている際にも「金正日総書記も密かに見て激怒した」という未確認情報が伝えられている。その時の大方の反応は「北朝鮮のテロ工作を素材に、さらに最後は韓国側が勝つというのだから怒ったのだろう」という程度のものだったが、ぼくは違うと思った。

映画マニアで映画を人民統治と支配の手段に最大限に活用してきた、朝鮮労働党文化芸術部と宣伝扇動部出身の金正日氏はそんな甘ちゃんではないからだ。「軍の反乱」という話に激怒したのである。》

金正日が『「軍の反乱」』という話に激怒する背景については、９４年に父金日成の突然の死後における権力基盤の確保の観点から、黒田勝弘はこう指摘する。

《正式に後継者として表舞台に登場した１９８０年の第６回党大会の後、北朝鮮の国内情勢は発展とは逆に疲弊が進んだ。父・金日成主席は終生の念願だった「白いコメのご飯に肉のスープ」という人民への約束も果たせないまま、この世を去った。

しかも１９９０年代後半には自然災害も重なり食糧難が深刻化し、飢餓状態にまで状況は悪化した。金日成死後、金正日氏にとっていいことは何もなかった。近年の公的スローガンである「苦難の行軍」はその苦境を象徴している。》

北朝鮮の苦境が深刻な飢餓状況として浮かび上がっていることは多くの亡命者の証言に示されており、《毎日、食いつなぎ、命を永らえることに精一杯で、体制批判の余裕（？）などない》状況下で、《体制あるいは権力からの民心の離反》は進行し、《多くの亡命者が人びとの自暴自棄的な心情を伝えているが、その中には「南北どちらが勝ってもいいから戦争が起きればいい」という、現状からの脱出を願う戦争待望論も少なからずある。》金日成はこの苦境のため、《最大の忠誠集団である軍を中心にして動揺する社会秩序を維持するとともに、軍部さえ掌握していれば何とかなるという権力維持策》としての「軍部中心体制」を取り、金日成の死後、《権力の維持のため軍の掌握と忠誠確保に全力を挙げてきた。この間の現地指導、現地視察のほとんどは軍・部隊関係ということがそれを物語っている。》

余談として、９９年に北朝鮮が輸入した７千台のベンツは、《金正日将軍が軍部を中心に忠誠分子に贈る恩賜の乗用車だという。》そのような「軍部中心体制」を確立している北朝鮮にあって、「軍の反乱」をテーマとする韓国映画に寛容であれというほうが無理かもしれない。アクション・メロドラマとかエンターテインメントといって苦笑して済ませるわけにはいかない北朝鮮のアキレス腱を、『シュリ』は確かに衝いていたのだ。映画『シュリ』の中で北の反乱軍が痛切に叫ぶ「南北統一」についても、黒田勝弘はこう記す。〈先の映画「シュリ」でもそうだし亡命者の証言もそうだが、北の民衆にとって今や「南北統一」だけが苦勞から解放される唯一の道なのだ。彼らは「南北統一」を夢見させられているからこそ、すべてを我慢し金正日将軍についてきている。

歓迎に動員された北の民衆は、南からの各種代表団に対しいつも涙を流しながら「万歳！」や「統一！」を叫ぶ。あの涙はすべての問題が解決される「統一」に向けた、苛酷な社会主義抑圧社会の苦勞——つまり「ハン（恨）」の涙なのだ。

だから北の民衆の支持をとりつけ、権力を維持し続けるためには、金正日総書記は必ず「統一」をいい続けなければならない。》

さて、「結局のところ北朝鮮は何のために日本人を拉致したのか？」という問題に戻ろう。李恩恵という日本人の拉致被害者に日本語を教えられた金賢姫が実行した「大韓航空機爆破」事件について、金時鐘はなぜ日本人の拉致被害者に「空恐ろしい事件の犯人の教育係を仰せ付けるであろうか」と呻くようにいうだけであったし、島田雅彦も「何のために行われたのか、わからない。破壊活動の何が北朝鮮の国益になっていたのか、さっぱりわからない。」といい、「金正日の妄想」として片付けようとしているが、彼らに欠けているのは、現代コリア研究所長の佐藤勝巳が『正論』（平成14年4月号）で指摘している、大韓航空機爆破の《二人のテロリストは、日本人のパスポートを持参していた。もし金賢姫が生きていなかったなら、日本人の二冊のパスポートと二人のアジア人の死体と大韓航空機爆破による韓国人115人の死亡という事実のみがのこる。誰が考えても日本人テロリストが、韓国人115名を殺害したということになる。》ということへの想像力である。

だが、それでも「日本人テロリストが、韓国人115名を殺害した」ことが北朝鮮にどのような国益をもたらすのか、という疑問がのこる。《こうなれば日韓関係は、国交断絶にもなりかねない。また、韓国経済も困難に陥るし、ソウル五輪前年末の事件であるから、オリンピック開催も危ぶまれる。》という佐藤勝巳によれば、日韓対立、ソウル五輪中止によって北東アジアは不安定な情勢になり、冷戦対立は続行しているのでソ連や中国の後押しによって、《韓国を赤化統一する》方向を一段と推し進められるということなのだ。つまり、日韓対立を促進させることが、韓国の赤化統一を狙う北朝鮮の国益に叶うことになるのである。

《その他の被拉致者の多くは、日本に侵入する北朝鮮工作員の「日本人化教育」に関与させられているとの情報が多い。》とも記されている。では、日本人に仮装した北朝鮮工作員は日本に侵入して、何を実行するつもりなのか。韓国の赤化統一を北朝鮮が企んでいるとすれば、日本に対しても同様の企みを抱いているとみなすべきではないのか。かつて朝鮮半島が日本に占領されていた事実を逆にして、今度は北朝鮮が日本を占領するという構想を金父子が練り上げていたとしてもそれほど荒唐無稽ではない。世界同時革命を掲げて北朝鮮に飛び込んできた「よど号」グループはその重要な役割を果たすために、金父子に「金の卵」として丁重に扱われているのではなかったか。

2002年12月1日記

